

[資 料]

スポーツ指導実技 A II (器械体操) 受講学生の学習経験に関する調査研究

前田 一篤¹・東川 安雄¹

Survey on Learning Experience of Students planning to take Sports Instruction Practical AII (Gymnastics)

Kazuma MAEDA, Yasuo HIGASHIKAWA

Abstract

The purpose of this study is to clarify the learning experience of gymnastics for students who intend to take sports instruction practical AII (gymnastics) with a view to obtaining a health and physical education's license. The analysis of the survey results for students revealed the following.

1. Regarding the likes and dislikes of gymnastics and their consciousness of their strengths and weaknesses, mat exercises and jump box exercises were favorably captured, but the horizontal bars tended to be divided into favored and unfavorable students.
2. Most of the students learned each exercise in elementary school, but there was a big difference in the lesson of each exercise in junior high school and high school.
3. Regarding the learning experience of skills learned in elementary school, there was a great difference between basic skills and advanced skills.

Key Words

Sports Instruction Practical A II (Gymnastics) (スポーツ指導実技 A II (器械体操)),
Learning Experience (学習経験)

緒 言

わが国の小学校や中学校、高等学校の教育において、体育が教科として位置づいた当時から学習内容として取り上げられてきた運動の一つに器械運動がある。このように歴史のある器械運動であるが、それを学習する児童・生徒だけでなく、その指導に携わる教師にとっても必ずしも好意的でない運動であると指摘されてきた。

関本¹⁾ が取り組んだ器械運動の授業実践におけ

る事前調査によると、体育授業で取り上げる運動について好きな順に番号を記入させたところ、器械運動を 1 位に挙げた児童は35名中ゼロ (0/35) であった。また、器械運動領域の中での好きな運動について調べたところ、マット運動が8/35、跳び箱運動が26/35であったのに対して、鉄棒運動は0/35であった。

一方、阿部ら²⁾ は、小学校教諭を対象とした調査により、器械運動の指導に対する苦手意識を明らかにしている。それによると、器械運動の指導を

¹ 広島文化学園大学人間健康学部 (Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

困難と感じている者は21.2%に上り、特に女性教諭にその傾向が顕著である。さらに鉄棒運動については全体の45.5%の者が指導に対する苦手意識を持っていると指摘している。また、清水ら³⁾も小学校教諭を対象とした同様の調査を行い、鉄棒運動で約75%、跳び箱運動で約63%、マット運動で約45%の教諭が「指導が難しい」と感じていることを明らかにしている。さらに、中野ら⁴⁾は、小学校教員養成課程の学生における器械運動の技の習得状況を調査し、習得率の高い技と低い技があることを明らかにしたうえで、その背景として初等・中等教育で学習した技に偏りが生じていたこと、学習が不十分だった技については、未習得のまま現在に至っていることが考えられると指摘している。このように、児童・生徒期の未修得状況や苦手意識を持ったままの状態が教員として採用され、指導が苦手な教員が器械運動に非好意的な児童・生徒を育ててしまうという悪循環が生じていることが窺える。このような悪循環を断つ方策の一つとして、「初等・中等教育での器械運動の学習状況を注視しながら、継続的に技の習得率の調査を実施し、教員養成校においてもカリキュラム・マネジメントを具体化していく必要がある」⁵⁾と考えられる。

そこで、本研究は、中学校・高等学校の保健体育教諭免許状の取得を視野に「スポーツ指導実技 A II（器械体操）」の受講を考えている学生の器械運動についての学習経験を明らかにすることを目的とするものである。

方 法

1. 調査対象者及び方法

調査対象者は、広島文化学園大学人間健康学部スポーツ健康福祉学科1年生で、2年次に開講されているスポーツ指導実技A II（器械体操）を受講予定の71名である。対象者に調査目的、匿名性等について説明し、承諾を得たうえで調査票を用いた配票調査で実施した。

2. 調査内容

調査票は、器械運動の好き嫌い、得意・不得意、小・中・高校時代の器械運動授業経験、小学校時代に学ぶ技の学習経験等、7項目で構成した。なお、小学校時代に学ぶ技の学習経験については、小学校学習指導要領解説体育編⁶⁾の第5学年及び第6学年の内容として例示されている技（マット運動13、鉄棒運動8、跳び箱運動4）を示し、練習した経験がある技に○印を記入する方法で回答を得た。

3. データ処理

本調査によって得られたデータについては、基本的には単純集計（%）を用いた。

結果と考察

1. 器械運動に対する意識

表1は、器械運動領域のマット運動、鉄棒運動と跳び箱運動のそれぞれに対する好き嫌いの意識を聞いた結果である。跳び箱運動において好意的な意識を持っている者が最も多く（「好き」と「少し好き」を合わせて69.0%）、他の運動と比較して「好き」(40.8%)と答えた者の割合が特に高い。次いで、マット運動（67.6%）が続く。鉄棒運動については好意的な者が52.1%、非好意的な者が47.9%と二分される傾向にあった。

さらに、表2は、器械運動領域の各運動に対する得意・不得意の意識をみた結果である。表1でみた好き嫌いの結果と同様の傾向がみられ、跳び箱運動やマット運動については「どちらかといえば得意」と答えた者が多い。一方、鉄棒運動については、好き嫌いの結果と同様に、「得意」と「不得意」に二分される傾向にあった。清水ら³⁾が行った調査によると、鉄棒運動で約75%、跳び箱運動で約63%、マット運動で約45%の小学校教諭が「指導が難しい」と感じている。単純に比較できないが、今回の受講予定者は各運動について、ある程度の技能を身につけている者たちであることが窺えた。

表1 器械運動に対する好き嫌い (%)

	好き	少し好き	少し嫌い	嫌い
マット運動	28.2	39.4	15.5	16.9
鉄棒運動	21.1	31.0	25.4	22.5
とび箱運動	40.8	28.2	11.3	19.7

表2 器械運動の得意・不得意 (%)

	どちらかといえば得意	どちらかといえば不得意
マット運動	57.1	42.9
鉄棒運動	50.7	49.3
とび箱運動	69.0	31.0

2. 器械運動の授業経験

表1及び表2でみたように、受講予定者は器械運動領域について、ある程度の技能を身につけていると思われる。では、そのような技能を身につける機会となる授業の経験はどの程度あったのであろうか。

表3は、器械運動領域の授業経験について、各運動別及び学校種別にみた結果である。マット運動については、小学校及び中学校では8割以上の者が授業を経験したと回答しているが、高校ではその割合が5割以下となった。跳び箱運動については、小学校で9割以上、中学校で約7割の者が経験しているが、高校では14.1%と大幅に減少する結果となった。鉄棒運動については、小学校で9割以上の高い経験率となっているが、中学校及び高校では大幅な減少となり、それぞれの学校で鉄棒運動の授業を経験した者はわずか25.4%と8.5%であった。このような授業経験が、受講予定者の器械運動に対する得意・不得意の意識に何らかの影響を及ぼしているものと思われる。

表3 器械運動の授業経験 (%)

	小学校	中学校	高校
マット運動	88.7	81.7	49.3
鉄棒運動	97.2	25.4	8.5
とび箱運動	94.4	66.2	14.1

3. 小学校時代に学ぶ技の学習経験

表4は、小学校時代における学習内容として例示されているマット運動の各技についての学習経験の結果である。回転系の技については「練習し

た」と回答する者が7～9割以上の割合となっており、学習経験の高さが窺える。しかし、発展技として位置づけられている「倒立前転」や「跳び前転」、「伸膝後転」についてはその割合がやや低い傾向にあった。倒立系については回転系よりも学習経験の割合が低く、6割程度であった。中でも、「頭倒立」や発展技の「倒立ブリッジ」、「ロンダート」の学習経験は3割から4割程度であった。中野ら⁷⁾が指摘するように、学習した技に偏りがみられた。東川⁸⁾は、現場の教師の中において、回転系のわざの習熟を経て挑戦できる技として倒立系の技が位置づけられてきているが、側方倒立回転等は同じ回転系においても前転等の接転技群とは異なる翻転技群の1つであることを十分に理解しておく必要があると指摘している。このような技の系統性等への理解不足による指導が、倒立系の学習経験の低さに影響しているのではないと思われる。

表4 マット運動の学習経験 (%)

系	技	%	系	技	%
回転系	前転	97.1	倒立系	側方倒立回転	66.7
	開脚前転	98.6		倒立ブリッジ	43.5
	倒立前転	82.6		ロンダート	47.8
	跳び前転	71.0		頭倒立	37.7
	後転	95.7		補助倒立	65.2
	開脚後転	89.9		倒立	65.2
	伸膝後転	69.6			

表5は、鉄棒運動の各技についての学習経験の結果である。上がり技の中で、鉄棒運動の代名詞ともいわれる「逆上がり」は92.8%と大多数の者が経験しているのに対して、「膝かけ振り上がり」については約4割と割合が低く、学習したことのある者が少ない傾向にあった。支持回転技については、「前方支持回転」は89.9%と高い割合を示しているが、「後方支持回転」は30%程度割合が低くなり、学習経験者は60.9%であった。支持回転技の基本技として位置づけられる「前方片膝かけ回転」及び「後方片膝かけ回転」については、それぞれの学習経験者の割合が43.5%及び27.5%であった。鉄棒運動において、技の系統性や安全

性の視点から片膝かけ状態の技の重要性が指摘されている⁹⁾が、上がり技、支持回転技のいずれにおいても、この片膝かけ状態からの技についてはあまり学習してきていない傾向が窺えた。

表5 鉄棒運動の学習経験 (%)

系	技	%	系	技	%	系	技	%
上がり技	膝かけ振り上がり	39.1	支持回転技	前方支持回転	89.9	下り技	転向前下り	18.8
	逆上がり	92.8		後方支持回転	60.9		踏み越し下り	20.3
				後方片膝かけ回転	27.5			
				前方片膝かけ回転	43.5			

表6は、跳び箱運動の各技についての学習経験の結果である。きりかえし系については、「腕立て開脚跳び」が95.7%、「かかえこみ跳び」が71.0%と多くの者が学習してきている。一方、回転系については、「台上前転」は65.2%と2/3程度の者が経験しているが、その発展技である「はね跳び」については40.6%と割合が低くなり、学習経験者は1/3程度に減少していた。東川¹⁰⁾は、跳び越しの安全性の確保に力点が過大におかれること、跳び箱運動の技術体系に関する視点や知識が不足していることが関係し、きりかえし系の技を中心とした指導となっていると指摘している。このような視点や知識の不足が、跳び箱運動の指導の難しさを生み、結果的に回転系の発展技の学習経験を少なくしているものと思われる。

表6 跳び箱運動の学習経験 (%)

系	技	%
きりかえし系	腕立て開脚跳び	95.7
	かかえこみ跳び	71.0
回転系	台上前転	65.2
	はね跳び	40.6

まとめ

本研究は、中学校・高等学校の保健体育教諭免許状の取得を視野に「スポーツ指導実技A II (器

械体操)」の受講を考えている学生の器械運動についての学習経験を明らかにすることを目的とするものであった。受講予定者を対象とした調査結果を分析し明らかになったことは次のとおりである。

1. 器械運動領域に対する好き嫌いと得意・不得意の意識については、マット運動や跳び箱運動は好意的に捉えているが、鉄棒については好意的な者と非好意的な者に二分される傾向にあった。
2. 器械運動の授業の経験については、小学校時代は各運動を大部分の者が学習していたが、中学校及び高等学校になると各運動の授業経験に大きな差がみられた。
3. 小学校時代に学ぶ技の学習経験については、基本技と発展技に大きな差がみられた。

次年度開講するスポーツ指導実技A II (器械体操)の指導に当たっては、シラバス(資料)及び今回の調査結果をふまえ、詳細な計画のもと展開していきたい。

引用・参考文献

- 1) 関本征司(1982) 小学生の体育学習における意識と教師の役割(その2)－主に器械運動の実践から－. 福島大学教育実践研究紀要, 2: 97-108.
- 2) 阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎(1983) 運動領域からみた教科体育の意識(第1報)－器械運動を中心に－. 文教大学教育学部紀要, 17: 26-37.
- 3) 清水清志・塩原茂・金子伊樹・関口明宏・高橋珠実・新井淑弘(2019) 小学校教諭の器械運動指導に関する意識について～群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から～. 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター, 36: 107-116.
- 4) 中野裕史・田村孝洋(2019) 小学校教員養成課程学生における器械運動の技の習得状況－2018年－. 中村学園大学・中村学園大学短期大

- 学部研究紀要, 51:9-16.
- 5) 中野裕史・田村孝洋 (2019): 16.
- 6) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版: 64-68.
- 7) 中野裕史・田村孝洋 (2019): 9-16.
- 8) 松田泰定・木原成一郎 (2002) 初等体育科教育の研究. 学術図書出版社: 152.
- 9) 学校体育研究同志会 (1974) 器械運動の指導. ベースボールマガジン社: 176-180.
- 10) 松田泰定・木原成一郎 (2002): 158.

資料

スポーツ指導実技AⅡ (器械体操) シラバス (授業計画)

回	授業のテーマ	講義内容	授業目標
1	授業内容・方法に関するガイダンス	本授業全体の内容・方法を説明すると共に、器械運動の特性を解説する。	授業の全体像と器械運動の特性を理解する。
2	マット運動の基本となる運動の学習と自己目標 (めあて) の設定	回転系の接転技群、ほんてん技群の基本となる技術を指導すると共に、マット運動における自己目標を設定させる。	マット運動の基礎技術の理解と自己目標を設定する。
3	接転技群の学習	前転、後転グループの基本的な技及び発展技における順次接転及び回転加速技術を高める運動技術と指導法を説明する。	接転技群の基礎技術と指導のポイントを理解する。
4	ほんてん技群の学習	側方倒立回転や前方倒立回転跳び等の支持回転における着 手及び回転加速技術と指導法を説明する。	ほんてん技群の基礎技術と指導のポイントを理解する。
5	運動の組み合わせ方と自由演技構成	グループ学習で相互評価を行わせながら、技を組み合わせる各自の演技を構成させ、練習・修正を行わせる。	グループ学習を行い個人の自由演技を構成する。
6	マット運動の演技発表 (実技テスト=評価活動)	各自の構成した演技発表を行わせる。(実技テスト=評価活動)	自由演技の発表と評価する。
7	跳び箱運動の基本となる運動の学習と自己目標 (めあて) の設定	跳び箱運動の基本的な技 (切り返し系・回転系) の基礎技術を指導すると共に、跳び箱運動における自己目標を設定させる。	跳び箱運動の基本となる運動の理解と自己目標を設定する。
8	切り返し系技の学習	切り返し系における着手時の突き放し技術を生かし、基本的な技から発展技までの技術と指導法を説明する。	切り返し系技の基礎技術と指導のポイントを理解する。
9	回転系技の学習	台上前転・はね跳びの発展技として、前方倒立回転跳びの基礎技術と指導法を説明する。	回転系技の基礎技術と指導のポイントを理解する。
10	切り返し系及び回転系の自由演技の構成	グループ学習で相互評価を行わせながら、切り返し系、回転系の技から各自の演技を構成させ、練習・修正を行わせる。	グループ学習を行い個人の自由演技を構成する。
11	跳び箱運動の演技発表 (実技テスト=評価活動)	各自の構成した演技発表を行わせる。(実技テスト=評価活動)	自由演技の発表と評価する。
12	鉄棒運動の基本となる運動の学習と自己目標 (めあて) の設定	基本的な上がり技及び下り技の技術と指導法を説明すると共に、鉄棒運動における自己目標を設定させる。	上がり・下り技の基礎技術と指導法の理解と自己目標を設定する。
13	支持回転系技の学習	基本的な前方及び後方支持回転の技とその発展技までの技術と指導法を説明する。	回転系技の基礎技術と指導法のポイントを理解する。
14	自由演技 (上がる-回る-下りる) の構成	グループ学習で相互評価を行わせながら、技を組み合わせる各自の演技を構成させ、練習・修正を行わせる。	グループ学習を行い個人の自由演技を構成する。
15	鉄棒運動の演技発表 (実技テスト=評価活動)	各自の構成した演技発表を行わせる。(実技テスト=評価活動)	自由演技の発表と評価する。